シリア中部，ビシュリ山系北麓
青銅器時代ケルン墓群出土の
石製・ファイアンス製ビーズの年代について

Dating of Stone and Faience Beads
from Bronze Age Cairn Fields
in the Northwestern Flank of Mt. Bishri, Central Syria

足立 拓朗^{*}
ADACHI Takuro

藤井 純夫^{**}
FUJII Sumio

ABSTRACT Our research project entitled “*Comparative Studies of Burial Practices of Semitic Ancient Pastoral Nomads*” shed light on Bronze Age cairn fields in the northwestern flank of Mt. Bishri, central Syria. A comparative study of a toggle pin from Burial Cairn No. 09 of Wadi Hedaja 1 enabled us to tentatively date them to a time range from the end of Early Bronze Age to the beginning of Middle Bronze Age. This paper briefly discusses the dating from another viewpoint, namely, a chronological review of stone and faience beads. Their re-examination showed that the Bishri Bronze Age cairn fields include Types 3 and 16 beads of K. R. Maxwell-Hyslop’s classification, and that similar examples were also found at the Early to Middle Bronze Age settlements along the Middle Euphrates River Basin. Both observations revalidated our previous dating.

I. はじめに

平成17年度発足の特定領域研究「セム系部族社会の形成——ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究——」（研究代表者：大沼克彦，国士舘大学教授）は，「部族制」をキーワードに様々な調査・研究を展開してきた。我々が担当したのは，ビシュリ山系北麓における青銅器時代ケルン墓群の調査である（図1，図2）。本稿の執筆時点（2009年夏）までに，計6回の調査を終えている（藤井 2005，藤井・足立 2007，Fujii

* 中近東文化センター研究員

Research Fellow, Middle Eastern Culture Center in Japan

** 金沢大学人文学類教授

Professor, Kanazawa University Faculty of Humanities

2008a, 2008b, Fujii et al. 2008a, 2008b, 足立 2008, 藤井 2009, 藤井・足立 2009)。その結果、1) この地域のケルン墓群は、中期青銅器時代前半の数百年間に短期的かつ集中的に造営されたこと、2) それらは3時期に区分できること、3) 大型の遊牧集団が関わっていたこと、が徐々に分かってきた。従って、ビシュリ山系北麓の青銅器時代ケルン墓群は、シュメールやアッカドの粘土板文書に記載された最初期のセム系集団マルトゥ（Mar-tu）またはアムル（Amurru）の墓域と考えられる。なお、中期青銅器時代前半という年代観は、ヘダージェ1=ケルン墓群（Hedaj 1）9号墓出土の青銅製トグル・ピンの比較型式学的検討から得られたものである（足立 2008：9）。この9号墓はヘダージェ編年（藤井・足立 2009, 藤井 2009）のPhase 2初頭に位置づけられるので、ビシュリ山系北麓のケルン墓群は、全体として前期青銅器時代末から中期青銅器時代に位置づけられるであろう、というのが我々の当面の年代観である（図3, 7）。

本稿では第1～第5次調査で出土した石製・ファイアンス製ビーズに着目し、上記の年代観を再検証する。比較の対象とした遺跡は、ユーフラテス河中流域の青銅器時代遺跡群、すなわち前期青銅器時代のアブ・ハマド（Abu Hamed）遺跡、前期～中期青銅器時代のテル・ビア（Tell Bi'a）遺跡、前期～後期青銅器時代のテル・ムンバカ（Tell Munbaqa）遺跡、である。これらの遺跡から出土した石製・ファイアンス製ビーズとの比較を通して、ビシュリ山系ケルン墓群の年代を再検討したい。

II. ワディ・ヘダージェ=ケルン墓群およびトール・ラフーム=ケルン墓群出土の石製・ファイアンス製ビーズ

第5次調査までに調査したケルン墓群は、ワディ・ヘダージェ=ケルン墓群（Wadi Hedaja Cairn Fields）とトール・ラフーム=ケルン墓群（Tor Rahum Cairn Fields）の、二つに大別される。前者は計4件のケルン墓群から成り、それぞれヘダージェ1～4=ケルン墓群と命名されている（図2）（藤井・足立 2009）。2008年3月から同年11月にかけて、計3回にわたって調査した。このうち本稿で言及するのは、ヘダージェ1=ケルン墓群と同4=ケルン墓群である。一方、後者は計3件のケルン墓群で構成される。本稿で扱うのは、2009年3月に調査したトール・ラフーム1=ケルン墓群である。

上記ケルン墓群で出土した石製・ファイアンス製ビーズは、計48点である。他に貝製のビーズが10点出土しているが、これについては別稿で考察したので省略する（足立・藤井 2009）。なお本稿では、K. R. マックスウェル=ハイスロップの提唱した分類案に従うこととする（Maxwell-Hyslop 1971：8）。ハイスロップ分類はウル（Ur）遺跡出土の金・銀製ビーズを対象に提示されたものであるが、初期王朝期から古バビロニアまでの資料を扱っており、本稿の対象時期と一致するからである。また、この分類に対応させる

ことによって、ビシュリ山系出土の石製・ファイアンス製ビーズを南メソポタミアの物質文化と比較することが可能となるからである。

ビシュリ山系ケルン墓群で出土した石製・ファイアンス製ビーズ48点は、すべて、ハイスロップ分類（1～21類）の枠内に収まる。以下、順に述べてみよう（図4）。1、2類の該当例（平面形・断面形共に方形を呈するビーズ）はないが、3類（平面形は方形、断面形は楕円形を呈するビーズ）の該当例が1点（図5:1）。ラピスラズリ製で、孔は直線的に穿たれ、表面は丁寧な磨かれている。本例は、ヘダージェ4=ケルン墓群2号墓からの出土である。2号ケルン墓はヘダージェ編年のPhase 1に属するので、このビーズは中期青銅器時代の初頭（前2千年紀初頭）に位置付けられるであろう。ハイスロップ分類（3類ビーズはアッカド期～ウル第3王朝期に年代付けられている）とは僅かな齟齬があるが、この問題については次章で論じる。

4類（短い管玉）は、2点出土している（図5:2, 3）。おそらく流紋岩製。一方、5類（長い管玉）は1点だけの出土である（図5:4）。赤瑪瑙製であろう。この3点は、ヘダージェ1=ケルン墓群の14号墓（Phase 1）から出土している。ハイスロップ分類では、前3～1千年紀の全期間にわたって継続する普遍的な型式と定義されている。

6類（端部がすぼまった管玉）も、1点のみ出土している（図5:5）。ファイアンス製。前述の4、5類と同じく前3～1千年紀の長い期間に使用された形態と考えられている。本例は、トール・ラフーム1=ケルン墓群126号墓（Phase 2または3）から出土した。

7類（平面形・断面形が共に楕円形を呈するビーズ）の該当例は見あたらないが、8類（中央部に長軸方向と直交する稜線の入る管玉）は、2点出土している（図5:6, 7）共に赤瑪瑙製である。ハイスロップ分類では、やはり前3～1千年紀がその使用期間とされる。トール・ラフーム1=ケルン墓群126号墓（Phase 2または3）、130号墓（Phase 1）から出土している。

9類（8類を細長くした形状のビーズ）、10類（切子玉状ビーズ）、11類（両端部が円錐状となる管玉）、12類（平面形が楕円形、断面形が円形となるビーズ）の該当例はない。ただし、13類（球状ビーズ）が計5点含まれる。これには、赤瑪瑙製（図5:8-11）とファイアンス製（図5:12）の二種類がある。この類型も、上述の管玉類と同じく、前3～1千年紀の全期間にまたがると定義されている。図5:8はヘダージェ1=ケルン墓群9号墓（Phase 2）、同9はトール・ラフーム1=ケルン墓群127号墓（Phase 3）、同10-11は133号墓（Phase 2）、同12は130号墓（Phase 1）からの出土である。

14類（全面が紐装飾で覆われる球状ビーズ）と15類（全面が不整の切子状を呈する球状ビーズ）はビシュリ山系では見あたらないが、16類（平行穿孔の円盤状ビーズ）が1

例認められる（図5：13）。赤瑪瑙製。長軸に沿って丁寧に穿孔され、表面はなめらかに磨かれている。本例は、トール・ラフーム1＝ケルン墓群の130号墓（Phase 1）から出土した。ハイスロップ分類では、初期王朝期に現れて次第に増加し、アッカド期からウル第3王朝期に最盛期をむかえる類型とされる。それ以降については、ハイスロップは特に記述をしていないが、後述の理由により、少なくとも前2千年紀の前半までは使用されたと考えるのが妥当であろう。

17類（垂直穿孔の円盤状ビーズ）は、2点出土している（図5：14, 15）。前者は大石製で、ヘダージェ1＝ケルン墓群10号墓（Phase 1）から出土している。後者はファイアンス製で、同9号墓（Phase 2a）からの出土である。ハイスロップ分類では特に所属時期が示されていないが、後述するように中期青銅器時代の周辺遺跡から出土していることが注目される。

18類（平玉あるいは白玉）は他を圧倒しており、計33点を数える。ハイスロップ分類では一括して扱われており、前3～1千年紀の普遍的なビーズ型式と考えられている。本稿では、平玉・白玉（図6：1-22）を18a類に、算盤玉（図6：23-34）を18b類に、それぞれ細分した。なお18a類は、径0.8cm以上の大型グループ（図6：1-10）と、径0.8cm未満の小型グループ（図6：11-22）に、さらに二分できる。18a類で最も多いのはファイアンス製の8点（図6：2, 4, 7, 8, 11-14）、次に多いのが赤瑪瑙製の7点（図6：1, 3, 5, 9, 17, 20, 21）である。また、他の類には見られなかった黒色あるいは白色を呈する石材も使用されている。前者はおそらく赤鉄鉱で、4点（図6：16, 18, 19, 22）がこれに該当する。この石材は18a類だけに用いられている。後者の事例は3点（図6：6, 10, 15）である。図6：1はヘダージェ1＝ケルン墓群9号墓、同2, 3, 11-15はヘダージェ4＝ケルン墓群2号墓、同4はトール・ラフーム1＝ケルン墓群117号墓、同5は118号墓、同6-8は123号墓、同9, 10は130号墓、同16-21は119号墓、同22は127号墓から出土している。18b類も様々なサイズが見られるが、その差異は漸移的であり、18a類のように大小2群に明確に分類できるわけではない。しかし、より大型のものが赤瑪瑙製（図6：28-34）、より小型のものがファイアンス製（図6：23-27）という素材区分は、共通して認められる。18a類のような白色あるいは黒色を呈する石材は使用されていない。図6：23-27はヘダージェ4＝ケルン墓群2号墓、28はトール・ラフーム1＝ケルン墓群123号墓、29-31は126号墓、32-33は130号墓からの出土である。

以上、まとめると以下ようになる。まず、ビシュリ山系のケルン墓群から出土したビーズの中で最も一般的な型式は、いわゆる平玉あるいは算盤玉（ハイスロップ分類の18類）である。素材は、主に赤瑪瑙とファイアンスである。ただし、これらは紀元前3千年紀から同1千年紀にかけて広く分布しているため、ケルン墓年代の検証にはあまり

役立たない。一方、出土点数こそ少ないものの、年代をある程度絞り込める型式は、3類（前3千年紀後半）と16類（前3千年紀末頃に最盛期）である。ハイスロップ分類が示唆する両者の年代は、前回考察した青銅製トグル・ビンの年代（前2千年紀前半）と大きく矛盾するものではないが、それでも若干の開きがある。この点について、次章で検討してみたい。

III. 周辺遺跡との比較

前章で述べた石製・ファイアンス製ビーズの中で、ケルン墓の年代推定に際して特に注目すべき類型は、3類（図5：1）と16類（図5：13）であった。3類は、アッカド期からウル第3王朝期、つまり前3千年紀後半の指標遺物となる。16類は、ウル第3王朝期、すなわち前3千年紀末頃に最盛期を迎える。これ以外では、17類（図5：14）の存在が注目される。ハイスロップ分類では時期は特定されていないが、17類は他のビーズよりも大型で表面の調整が丁寧な優品であるため、類例を渉猟しやすいからである。以下の考察では、これら三つの類型に着目する。その類例を周辺遺跡から抽出することにより、ビシュリ山系ケルン墓群の年代を再検証したい。

まず、ビシュリ山系に最も近いアブ・ハマド遺跡から検討してみよう。この遺跡は、ビシュリ台地縁辺の墓地遺跡で、前2300年頃に年代付けられている（Falb et al. 2005: 245）。実測図を見る限り、管玉類（4, 5, 6類）や平玉類（18a類）が多く出土している。素材は、赤瑪瑙やファイアンスが多い。しかし、アブ・ハマド遺跡では上記3種の類例は出土していない。従って、本稿の考察からは当面除外される。

次に、ラッカ周辺で最大の前期～中期青銅器時代都市遺跡であるテル・ビア遺跡を見てみよう。この遺跡では、前期青銅器時代後半から中期青銅器時代初頭の墓群が検出されている。この墓群は1～7期（Gräber Gruppe 1-7）に区分されており、1～6期が前期青銅器時代後半、7期が中期青銅器時代初頭（前期～中期青銅器時代移行期）に、それぞれ位置づけられている（Stromenger und Kohlmeyer 1998; Hempelmann 2002: Tabelle 2）。1期の墓から、16類（ラピスラズリ製とファイアンス製）が出土している（ibid: Tafel 69: 11, 14）。1期は前3千年紀半ば頃に年代付けられるため、ハイスロップ分類の年代観を裏付ける出土例と言える。また、4期には3類（ファイアンス製）が出土している（Stromenger und Kohlmeyer 1998: Tafel 44: 19/14）。4期は前期青銅器時代後半、つまり前3千年紀後半に相当しており、これもハイスロップ分類の年代観を裏付けている。16類や3類はビア遺跡では稀な出土例であり、ビーズの多くは管玉（4, 5, 6類）や平玉（18a類）が占めている。またビーズの多くが赤瑪瑙製あるいはファイアンス製である。このような傾向は、ビシュリ山系北麓ケルン墓とも合致している。

最後に、ラッカ (ar-Raqqa) からユーフラテス河を約100 km 遡ったテル・ムンバカ遺跡の出土資料を検討する。前期青銅器時代の出土遺物に17類ビーズ (水晶製) を見いだすことが出来る (Czichon und Werner 1998: Tafel 119: 1471)。この資料は、ヘダージェ 1 = ケルン墓群10号墓出土の大理石製の17類資料と形態的に極めて類似している。中期青銅器時代の層からも10号墓出土品に酷似した17類が出土している (ただし、石材不明) (ibid: Tafel 121: 1583)。これら 2 例は、ヘダージェ 1 = ケルン墓群10号墓出土の17類資料 (大理石製) と石材こそ異なるものの、表面処理の点では似ており、同時代資料と見てよからう。中期青銅器時代の層からは、3 類も出土している (ibid: Tafel 119: 1512)。ヘダージェ 4 = ケルン墓群 2 号墓出土資料より、平面形がやや丸みを帯びるが、その形態・サイズはよく似ている。3 類はハイスロップ分類では前 3 千年紀後半に位置づけられている。同じく 3 類が出土したヘダージェ 4 = ケルン墓群 2 号墓の推定時期 (前 2 千年紀初頭) とやや齟齬があることを前章で指摘したが、テル・ムンバカ遺跡の出土例から見て、3 類は中期青銅器時代まで用いられたと考えるべきであろう。

IV. ま と め

ビシュリ山系北麓ケルン墓群から出土した石製・ファイアンス製ビーズについて、比較検討した。その結果、同ケルン墓群出土の石製・ファイアンス製ビーズは、形態・材質の点で、ユーフラテス河中流域の前期～中期青銅器時代遺跡の出土品と一致していることが判明した。特に、3 類および16類、17類の出土は、重要である。

3 類については、中期青銅器時代まで下る可能性が確認された。また、16類の最盛期が前期青銅器時代末にあっていること、17類の類例は中期青銅器時代に見られること、も指摘できた。こうした検討結果は、ビシュリ山系北麓ケルン墓群に関する従来の年代観 (前期青銅器時代末から中期青銅器時代前半) を、改めて裏付けている (図 7)。ただし、従来の年代観は、青銅製トグル・ピンの年代 (中期青銅器時代前半) に若干の幅をもたせて設定したものである。その意味で、十分絞り込んだものとは言い難い。この点で示唆的なのが、周辺遺跡で検出されたトグル・ピンの類例が中期青銅器時代に集中していること (足立 2008)、石製・ファイアンス製ビーズの年代もどうやらこれと同調しそうなこと、である。だとすれば、ビシュリ山系北麓ケルン墓群の年代を中期青銅器時代前半に絞り込むことも可能であろう。同ケルン墓群では、土器や貝製ビーズ、あるいは青銅短剣なども出土しており、その検討からもこの新たな年代観が補強されつつある (足立・藤井 2009)。今後は放射性炭素年代測定などのデータを加味しながら、各ケルン墓群の年代をさらに追求していきたい。

本稿の執筆にあたり、木内智康氏の収集した文献を利用させていただいた。また、古代オリエント博物館および津本英利氏からも、文献を借用させていただいた。記してお礼申し上げます。

参 考 文 献

- Akkermans, P. M. M. G., and G. M. Schwartz 2003 : *The Archaeology of Syria: From Complex Hunter-Gatherers to Early Urban Societies (ca. 16,000-300 BC)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cooper, L. 2006 : *Early Urbanism on the Syrian Euphrates*. New York: Routledge.
- Einwag, B. 1988 : *Die Keramik aus dem Bereich des Palastes A in Tall Bi'a/Tuttul und das Problem der frühen Mittleren Bronzezeit*. Munich: Profil.
- Falb, C., K. Krasnik, J.-W. Meyer, and E. Vila 2005 : *Gräber des 3. Jahrtausends v. Chr. im Syrischen Euphrattal. 4. Der Friedhof von Abu Hamed*. Saarbrücken: Saarbrücker Druckerei & Verlag.
- Fujii, S. 2008a : “The General Survey of Pre-Islamic Burial Cairns in the Northern Flank of Jabal Bishri,” In: Ohnuma, K. and A. Al-Khabur (eds.) “Archaeological Research in the Bishri Region: Report of the Second Working Season,” *Al-Rafidan* 29, 136-138.
- Fujii, S. 2008b : “A Brief Sounding at Rujum Hedaja 1. In: Ohnuma, K. and Khabur,” A. (eds.) *Archaeological Research in the Bishri Region: Report of the Fifth Working Season*, Field Report submitted to the Department of Antiquities and Museums of Syria. Damascus.
- Fujii, S. and T. Adachi 2010 : “Archaeological Investigations of Bronze Age Cairn Fields in the Northwestern Flank of Mt. Bishri,” In: the Supervising Team of the Research Project “Formation of Tribal Communities in the Bishri Mountains, Middle Euphrates (ed.) *Formation of Tribal Communities: Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria*. Tokyo (in print).
- Fujii, S., T. Adachi, and K. Suzuki 2008a : “The Second Field Season at Rujum Hedaja 1,” In: Ohnuma, K. and al-Khabur, A. (eds.) *Archaeological Research in the Bishri Region: Report of the Sixth Working Season*, Field Report submitted to the Department of Antiquities and Museums of Syria. ar-Raqqa.
- Fujii, S., T. Adachi, and K. Suzuki 2008b : “The Soundings of the Hedaja Cairn Fields, the Northwestern Flank of Jabal Bishri,” In: Ohnuma, K. and Sultan, A. (eds.) *Archaeological Research in the Bishri Region: Report of the Seventh Working Season*, Field Report submitted to the Department of Antiquities and Museums of Syria. ar-Raqqa.
- Hempelmann, R. 2002 : “Frühbronzezeitliche Keramik aus Kharab Sayyar und Tell Chuera,” *MDOG* 134, 285-309.
- Lebeau, M. in collaboration with A. Pruss, M. Roaf and E. Rova 2000 : *Stratified Archaeological Evidence and Compared Periodizations in the Syrian Jezirah during the Third*

- Millennium B.C., in C. Marro and H. Hauptmann (eds.) *Chronologies des pays du caucase et de l'Euphrate aux IVe-IIIe Millénaires, Actes du Colloque d'Istanbul, 16-19 Décembre 1998*, Paris: De Boccard, 167-192.
- Maxwell-Hyslop, K. R. 1971 : *Western Asiatic Jewellery c. 3000-612 B.C.* London: Methuen.
- Pons, N. 2001 : "La poterie de tell Amarna (Syrie) au BA IV et BM I: Première approche et corrélation avec quelques sites clés," *Akkadica* 121, 23-75.
- Riis, P. J. and M-L. Buhl 2007 : *Hama: Fouilles et recherches de la fondation carlsberg 1931-1938, I 2, Bronze Age Graves in Hama and Neighbourhood*. Copenhagen: Nationalmuseet.
- Strommenger, E. and K. Kohlmeyer 1998 : "*Tall Bi'a/ Tuttul - I: Die Altorientalischen Bestattungen*," Saarbrücken: Saarbrücker Druckerei und Verlag.
- Weiss, H. 1990 : "Civilizing" the Habur Plains: mid-third millennium state formation at Tell Leilan. In Matthiae, P., M. van Loon and H. Weiss (eds.) *Resurrecting the Past: A Joint Tribute to Adnan Bounni*, pp.387-407 Istanbul: Nederlands Historisch-Archaeologisch Instituut.
- 足立拓朗 2008 : 「ヘダー ジェ 1 = ケルン墓群出土の青銅製品」『Newsletter セム系部族社会の形成』11, 7-13.
- 足立拓朗・藤井純夫 2009 : 「ビシュリ山系北麓青銅器時代ケルン墓群出土の貝製品の年代について」『Newsletter セム系部族社会の形成』15 (印刷中).
- 久米正吾・沼本宏俊 2009 : 「テル・ガーネム・アル・アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群の調査」『Newsletter セム系部族社会の形成』14, 11-19.
- 藤井純夫 2005 : 「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」『Newsletter セム系部族社会の形成』1, 6.
- 藤井純夫 2006 : 「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」『Newsletter セム系部族社会の形成』2, 5-7.
- 藤井純夫 2009 : 「計画研究班「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」」大沼克彦編『セム系部族社会の形成平成19年度研究成果報告』30-35.
- 藤井純夫・足立拓朗 2007 : 「2007年度ビシュリ山系北麓ケルン墓サーベイ」『Newsletter セム系部族社会の形成』7, 1-5.
- 藤井純夫・足立拓朗 2009 : 「ビシュリ山系北麓ケルン墓群の第一次～第三次発掘調査」『Newsletter セム系部族社会の形成』14, 6-10.

図1 ユーフラテス河中流域とビシュリ山系（太枠内が調査区域）

図2 ビシュリ山系北麓ケルン墓群の分布 (WHD: ヘダージェ=ケルン墓群, WRH: ワディ・ラフーム=ケルン墓群, TRH: トール・ラフーム=ケルン墓群)

図3 ヒダージュ=ケルン墓群におけるケルンの型式編年図 (Fujii and Adachi 2010: Fig. 8)

図4 ハイスロップによるビーズの型式分類図 (Maxwell-Hyslop 1971: Fig. 6 に加筆)

図5 ヘダージェ=ケルン墓群とトール・ラフーム=ケルン墓群から出土した石製・フ
 ァイアンス製ビーズ(1) 1:3類; 2-3:4類; 4:5類; 5:6類; 6, 7:8類;
 8-12類; 13類; 13:16類; 14, 15:17類

図6 ヘダージェ=ケルン墓群とトール・ラフーム=ケルン墓群から出土した石製・ブ
 ァイアンス製ビーズ(2), 1-22:18a類; 23-34:18b類

(B.C.)	Northern Syria							Mesopotamia		
	W. Syria	Ebla	Hama	Middle Euphrates	Bishri	Tell B'ā	Leilan	Mari	Jazirah	S. Mesopotamia
2,500	EB III			Phase 4		Schicht 15-21 KK1		Ishtar Palace P-I	EJ IIIb	ED IIIb
			K			Gräber Gruppe 1 Schicht II-14 Gräber Gruppe 2	c b a			
	EB IVa	Mardikh IIB 1		Abu Hamad		Gräber Gruppe 3 Schicht 5-10 KK2	II		EJ IVa	Akkad
				Phase 5		Gräber Gruppe 4 Gräber Gruppe 5 Gräber Gruppe 6			EJ IVb	
	EB IVb (EB-MB)	Mardikh IIB 2	J 6-8			Gräber Gruppe 7 KK3			EJ V	Ur III
2,000			J 1-5	Phase 6				Shakkanaku level Palace P-O Shakkanaku period		
	MB I				Phase 1 Phase 2 Phase 3 Phase 4	KK4-7				Issin/Larsa
		Mardikh IIIA	H 5			Yunger Palace early	I			
			H 4					Yahdum-lim		
	MB II		H 3			Yunger Palace late KK7		Zimrilim		Old Babylon
		Mardikh IIIB	H 2 H 5					Hana period		
1,500	LB I		G 2							Kassite

図7 ビシュリ山系北麓ケルン墓群の編年 (Akkermans and Schwartz 2003; Cooper 2006; Einwag 1998; Lebeau 2000; Pons 2001; Riis and Buhl 2007; Weiss 1990 を基に加筆・統合した。)